# 大学生が運営する富山市のゲストハウスが人気

新型コロナウイルス感染が全国的に落ち着きを見せ、アフターコロナに向けた取り組みをやっと考えられる状態になってきた。富山県でも来年度の成長戦略の柱の１つに「スタートアップ支援戦略」を挙げている。スタートアップのためには「突き抜けた人材やチャレンジしようとする人材が富山県内で自由に活動しやすい環境を整備する必要がある」と富山県は示している。しかし現状は富山県からの起業社数は低く、学生ベンチャー数も全国下位の状態が続いている。

その中で、富山市のゲストハウス「泊まれる図書館・寄処（よすが）」が注目を集めている。社会人と富山大学生で起業したLabore株式会社が2019年秋に空き店舗を改装してオープン。開店にはクラウドファンディングも活用して、開店前から注目を集めた。寄処は富山の学生で運営しているのが特徴だ。管理人は富山大学の秋元結羽さんが務めていて、自らを「若女将」と呼び、接客やイベント企画など奮闘している。

お客さんは全国の若者が中心でいつも活気あふれている。学生はもちろん、日本一周する旅人、長期滞在する人、寄処目当てに富山県に初めて来た人もいる。地元の学生や社会人も混じって畳のロビーで読書会、ボードゲーム大会などの交流イベントのほか、ピッチ会も行っている。新しいビジネスがここから生まれるかもしれない。

富山市には駅前に富山市が運営するコワーキングスペース「Sketch Lab（スケッチラボ）」や中心市街地に民間企業が手掛けるインキュベーションオフィス「HATCH（ハッチ）」など、学生と社会人が共創・意見交換する場所が2020年に誕生している。いずれも高校生・大学生が企画・運営に関わっている。オンラインも活用して多彩な交流が全国に広がっている。“閉鎖的”と言われていた富山県。学生たちの新しい動きがその壁を打ち破る日は近いかもしれない。

北日本新聞社　営業局企画事業部長　堀井政彦

「泊まれる図書館・寄処」の外観。空き店舗を改装して2019年に開店した

寄処の“若女将”秋元結羽さん「交流から学んだことを将来に活かしていきたい」